

# 建設業と農業の融合を発信

建設トップランナーフォーラム 仙台でアグリ分科会を開催

## 知恵絞り大胆に参入を―特別講演の 大泉教授

新事業、技術開発に挑戦する建設企業や支援者で構成する建設トップランナーフォーラムの「アグリビジネス分科会2009（仙台）」が23日、仙台市の宮城県庁で開かれた。同分科会を地方で開催するのは今回が初めて。全国から約100人が集まる中、企業間連携による農業ビジネスの展開をテーマに事例発表や特別講演、参加者を変えた討論会を行い、宮城から建設業と農業の融合の在り方を発信した。

約100人が集まり熱気に包まれた会場



開催に当たって、同分科会では、東北地方の取組事例を軸に「建設業の皆さんが公共事業が減少してもほかの仕事を興すことが大事」と述べ、業種の壁を越えた複業化の重要性を訴えた。

原氏は、17年に東の補助を受けトマト栽培を始め、その後毎年販売額や販路を伸ばしていることを明かした上で「農業は儲からないといわれるが、今の売り値だと意外に行ける」という印象だ。販路を伸ばせば農業も本業に成りうる」と力を込めた。

ト製造などを展開する愛亀の西山周社長は、農業への取組について説明、課題となる販路開拓について「いかにアピールするかがカギ。環境への取組、安全、安心、美味しさなど一つ一つの積み重ねでブランドینگを行うことが重要」と訴えた。

この後、宮城大学事業構想学部教授で同大学院事業構想研究科長の大泉伸和氏が「アグリビジネス」について講演した。

大泉氏は「地域農業を核とした融合産業化」と題して講演した。大泉氏は農業の現状について、オランダやデンマークのように他産業との連携で成長産業に転換する可能性を示したほか、農業種参入の実態や、農水省の特定法人貸付制度、農商工連携法といった行政の支援策を紹介し、その上で「農業は決して儲からないことはない。弱気にならず知恵を絞り、大胆に参入してほしい」とエールを送った。

大泉氏は島根県で農業に参入した企業のうち建設業が6割に上るものの、黒字化するまでには5年以上かかり、各企業が予想以上に厳しい状況にあることを説明。小島氏は、販路拡大、商品開発、生産拡大、地域交流について連携の事例を紹介した上で「業者からは建設業と農商工業をつなぐビジネスの仲介役が見付からないという声を聞く」と課題を指摘した。

また、農協との付き合い方について西山氏は「有用な情報が多く、非常に重要」とする一方、笠原氏は「組合には加入しているがまったく出向していない」と説明。これを受けて大泉氏は「地域の

引続き、東北地方整備局、東北農政局、東北経済産業局の担当者が来年度の関連施策を紹介した後、仲和興業（仙台市）の笠原幸社長と愛亀（松山市）の西山周社長が事例発表を行った。

西山周社長は「農業への取組について説明、課題となる販路開拓について「いかにアピールするかがカギ。環境への取組、安全、安心、美味しさなど一つ一つの積み重ねでブランドینگを行うことが重要」と訴えた。

この後、宮城大学事業構想学部教授で同大学院事業構想研究科長の大泉伸和氏が「アグリビジネス」について講演した。

大泉氏は「地域農業を核とした融合産業化」と題して講演した。大泉氏は農業の現状について、オランダやデンマークのように他産業との連携で成長産業に転換する可能性を示したほか、農業種参入の実態や、農水省の特定法人貸付制度、農商工連携法といった行政の支援策を紹介し、その上で「農業は決して儲からないことはない。弱気にならず知恵を絞り、大胆に参入してほしい」とエールを送った。

大泉氏は島根県で農業に参入した企業のうち建設業が6割に上るものの、黒字化するまでには5年以上かかり、各企業が予想以上に厳しい状況にあることを説明。小島氏は、販路拡大、商品開発、生産拡大、地域交流について連携の事例を紹介した上で「業者からは建設業と農商工業をつなぐビジネスの仲介役が見付からないという声を聞く」と課題を指摘した。

また、農協との付き合い方について西山氏は「有用な情報が多く、非常に重要」とする一方、笠原氏は「組合には加入しているがまったく出向していない」と説明。これを受けて大泉氏は「地域の

部主任研究員の渋谷佳男氏がコーディネーターとなり、大泉氏、笠原氏、西山氏に島根県農業経営課の青戸貞夫氏と建設新聞社の小島義弘編集長が加わり、「建設業の農業参入に関する総合討論」を行った。

青戸氏は島根県で農業に参入した企業のうち建設業が6割に上るものの、黒字化するまでには5年以上かかり、各企業が予想以上に厳しい状況にあることを説明。小島氏は、販路拡大、商品開発、生産拡大、地域交流について連携の事例を紹介した上で「業者からは建設業と農商工業をつなぐビジネスの仲介役が見付からないという声を聞く」と課題を指摘した。

また、農協との付き合い方について西山氏は「有用な情報が多く、非常に重要」とする一方、笠原氏は「組合には加入しているがまったく出向していない」と説明。これを受けて大泉氏は「地域の

農協によって特徴がある。それを見極めた上でどう付き合うか考えるべきだ」と提言した。

このほか、会場では来場者からの質問にパネルラーが答える一方、来場者が取り組み事例を紹介する場面も見られた。

渋谷氏は「ビジネスチャンスはたくさんある。融合の新しい形をつくってほしい」と期待を寄せた。

大泉氏は「地域の農業を核とした融合産業化」と題して講演した。大泉氏は農業の現状について、オランダやデンマークのように他産業との連携で成長産業に転換する可能性を示したほか、農業種参入の実態や、農水省の特定法人貸付制度、農商工連携法といった行政の支援策を紹介し、その上で「農業は決して儲からないことはない。弱気にならず知恵を絞り、大胆に参入してほしい」とエールを送った。

大泉伸和興業社長



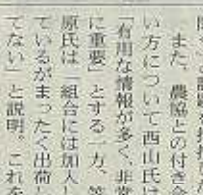
西山愛亀社長



大泉教授



大泉教授



大泉教授

